



「政府や分科会の専門家がまとめたコロナ対応には、現場の視点が抜けている」と訴える医師が、診療所で新型コロナウイルスの早期診断と治療に尽くした1年半の間にブログにつづった日記をまとめた。  
著者の長尾和宏医師(63)は兵庫県尼崎市で診療所を開業

## 町医者が見た コロナと医療崩壊

長尾和宏著

### ひとりも、死なせへん



長尾和宏

「コロナ禍と闘う  
尼崎の町医者、  
551日の  
壮絶日記」

### ひとりも、死なせへん

して以来27年間、地域の町医者として働いてきた。コロナ禍では診療所の裏手にテントを治療してきた。張りの発熱外来を設けるなどして、約600人のコロナ患者を治療してきた。

「ひとりも、死なせへん コロナ禍と闘う尼崎の町医者、551日の壮絶日記」(ブックマン社)。9月発行。税込み1650円。著者は在宅医療の専門家でもある。

本書では、爆発的な感染拡大によって、陽性が判明しても搬送先がない「医療崩壊」の現場も報告されている。阪神間でも患者が自宅待機中に死亡する事例が起きた。著者は、保健所にコロナ患者の対応を集約する仕組みが一因になったと批判する。  
診療所では、開業医に処方薬が認められている限られた薬を用いて重症化の防止に努めたという。開業医が早期診断と初期治療に積極的に取り組むことで、医療崩壊を防ぎ死

者を減らせたと指摘する。ステイホームの長期化によって、高齢者や認知症患者が健康を損なうことにも懸念を示す。糖尿病の悪化や血圧の上昇を招くほか、フレイル(心身の衰え)や認知機能の低下にもつながるといふ。

「感染多発地域で医療崩壊を防ぐためにどのような対応したか。次のパンデミックに備えて、政府関係者や医療従事者にこそ読んでもらいたい」と出版の意図を語る。

(井岡諒)